

渡辺克己著

曲豆後の
武將と合戦

【第七章】 南北朝動乱 高崎山の攻防①



●原著案内

本デジタルブックは、以下の書籍「豊後の武将と合戦」をデジタル化したものです。

「豊後の武将と合戦」

著者：渡辺 克己

A5版 314 ページ

発行：大分合同新聞社

発行日：2000年2月15日

定価：2300円（税込み）



購入問合せ：その他の大分合同新聞社の本については、大分合同新聞文化センターへ
電 097-538-9662 「合同新聞の本」 Web ページ

※奥付け／デジタルブックについて

（題字と挿絵は二紀会委員・菅久）

- ① 親王軍の豊後侵攻
- ② 偽りの降参
- ③ 降参は返上する
- ④ 再び豊後攻撃へ
- ⑤ 志賀勢背後に迫る
- ⑥ 三度目の豊後侵入

目次

【写真】 挾間町高崎から望む高崎山

第七章 ● 南北朝動乱 高崎山の攻防 ①



挾間町高崎から望む高崎山

① 親王軍の豊後侵攻

——まさに雲霞のこころ——

一世紀以上も政権をにぎっていた鎌倉幕府を倒して、王朝政治を取り戻した後醍醐天皇の新政は、足利尊氏の謀反で、つかの間に崩れた。吉野に逃れた後醍醐天皇の南朝と、尊氏が奉じた光厳天皇に始まる北朝の、二つの勢力が国内を分断した。いわゆる南北朝動乱時代。南朝四帝、北朝五帝を重ね、約六十年にわたって乱れに乱れた。

その動乱時代、九州における攻防の重要な目の一つは、北朝側に組みする豊後の守護・大友氏である。大友氏の拠る高崎山城は、北朝勢力の大切な要（かなめ）であった。その高崎山の城を築いたのは、大友家八代の当主氏時である。

当時、九州では南朝側が北朝側を圧倒し、九州各地を席卷していた。その中心勢力は、征西大將軍宮懐良（かねなが）親王を奉じた、肥後の菊池氏である。

懐良親王は、後醍醐天皇の第十六皇子で、生涯を動乱の戦火にもまれつづけた、いわば悲劇の皇子であった。

尊氏が、九州落ちから再起して、京都に攻め上った延元元年

（北朝・建武三年—

一三三六）、後醍醐天

皇は、将来に備えて懐

良親王に征西大將軍の

称号を与えて九州に下

した。親王はこの時よ

うやく十歳。従う者は、



わずかに十二人であったという。従者の筆頭は、後醍醐天皇の信任の厚い五條頼元。建武の新政では諸国の国守を歴任した人であった。

そのころ、親王が九州で頼れる勢力は、肥後の菊池氏と阿蘇氏ぐらいだったが、まだ両家とも親王を迎え入れる態勢ではなかった。そのため親王一行は、四国を経て、ひそかに豊後、日向、薩摩と潜行を続けた。その間に幼い親王も成長して、肥後に入ったときは二十三歳。十三年間の歳月を費やしている。

親王を迎えた肥後の菊池氏は、ここで大いに態勢をととのえ、九州南朝勢力の中心的存在となった。

そのころ、京都の足利一族に内紛が生じたために、北朝側勢力にひずみができていた。これに乗じて南朝側が勢いを盛り返していたから、成人した征西大將軍懷良親王の存在はにわかに強力なものとなった。

足利氏の内紛というのは、尊氏と弟の直義（ただよし）の間に生じた権力争いの確執である。争いがつれて、直義が南朝側と結び、尊氏もまた南朝側に降ったように見せかけて、直義を殺すという騒動。さらに尊氏の私生児である直冬（ただふゆ）の乱が起こる。尊氏は直冬を嫌って、子として認めなかったので、叔父の直義が養子にしていたが、直義の乱後、直冬は九州に逃れ、九州北部に勢力を持つ少弐頼尚（よりひさ）を頼り、かねて恩賞などで尊氏に不満を持つ各地の武士を味方に入れ、尊氏に背いた。直冬は間もなく失脚するが、九州の北朝側は、このため弱体化し、これに乗じて南朝側が強大になっていったのである。九州の北朝側勢力の壊滅を目指す菊池武光らが懐

良親王を奉じて、豊後に攻めこんだのは、正平十年（北朝・文和四年―一三三三）十月。これが第一回の豊後侵入だった。

親王軍は、玖珠・由布・挾間のコースをとって府内に接近した。「親王の大軍が迫った」という知らせが、大友の当主氏時のもとへ、矢継ぎばやに届いた。しかし氏時は、これを迎え討つか、上野の砦（とりで）に籠もって防ぐか、その応戦に迷った。

このとき、まだ高崎山城は構築されていず、府内上野の丘陵上に防御の砦を構えているのみであった。これを西山城と称していたようだが、上野の丘陵は、南北にはやや険しいといっても、低い丘にすぎない。西は高崎山の腰からゆるやかな尾根路が続き、東は大分川の岸に小さな段丘をなして臨んでいる。強大な敵襲を支えうる地勢ではない。これまで豊後は大きな外敵に攻めこまれることがなかったので、豊後守護の本拠地として、これですんでいた。しかし今回はそうはいかぬ。

まさに雲霞（うんか）のごとく、の表現どおり、大分平野を埋めて攻めこんで来た親王軍のはためく旗幟を遠望して、氏時は息をのんだ。

② 偽りの降参

―― 優勢な親王軍かわす ――

「お屋形（やかた）さま。もはや迷っておるいとまはありませんぞ」

親王を奉じた大軍の襲来に動揺している大友氏時の耳元でささやいたのは、重臣田原直貞であった。田原氏は、国東の飯塚城に本拠を持つ、大友一族の名門で、老巧な直貞に対する足利

尊氏の信望は厚かった。若い当主が続く大友本家の後見的角色を自他ともに許し、尊氏もそれを認めていた。

「ならば、どうしようと思つたのか。討つて出よとでも…」

「とてもものことに……。勢いに乗った肥後の軍勢に刃向かうのは無理というもの。明日にもこの城は踏みつぶされましようぞ」

「では、刃向かわずに何とする」

「降参でござる。損害が出ぬうちに旗を降ろして、敵の矛先(ほこさき)をかわしましょう」

「降参するのか…」

氏は目をむいて直貞の次の言葉を待った。直貞はにやりと口元に笑みを浮かべた。

「ひとまず陣門に降つて親王軍に従えば、敵は囲みをといて北上し豊前から筑前へ向かうは必定。博多には強力な北朝側の探題職一色範氏殿がおります。親王軍は、これを九州から追いつ出すことが目下の急務ですから

な。その間に、われらは次の策を

考えてはいかがが…」

「するところ…」

「さよう。偽りの降参」

「わかつたぞ」

氏は頬を紅潮させて、直貞の手を握った。ただちに軍議を催して一決。軍使を送つて降参の手を打った。

懐良親王は、大友が抵抗するこ



となく降参したのには意外な感を抱きつつも、氏時がきっぱりと「向後誓つて宮方（みやかた）へ御味方つかまつる」を誓約したのに気を良くした。

菊池武光は、かつて元弘三年（一二三三）、父武時が鎌倉幕府の鎮西探題（博多）に、北条英時を攻めたさい、大友貞宗と少弐貞経に裏切られたため戦死した恨みを忘れていない。だからこの降伏には不足の思いが残ったが、筑前への進撃をひかえて一兵も損せず豊後を従えさせたことは成功、と自らに言い聞かせた。

親王軍は、大分平野の布陣を、さっと収めて北上を開始した。

高崎山の腰を越え、速見を抜け、豊前の宇佐、城井を席卷して、筑前の博多へ。それは怒濤のような進撃であった。九州探題の一色範氏は、親王軍を防ぎようもなく、博多を捨てて長門国へ逃れた。

大友氏時は、親王軍の去ったあと、田原直貞にいった。

「豊後守護の館（たち）を、高国府（上野）に設けて長の年月を安泰に過ごしてきたが、これからはそうは参らぬことを思い知らされた。戦わずして敵に降るといふ武門の恥は、二度と繰り返しようない。断じて敵を寄せつけぬ城郭を持たねばならぬ。そこで考えたのは高崎山じゃが、どうであろうか。あそこなら堅固な砦（とりで）ができよう」

高崎山は府内の西にそびえる城塞に適した標高六百二十メートルの山塊。氏時は、かねてから高崎山に目を注いでいたが、親王軍の侵入を受けて、堅固な山城構築の思いが一挙に吹き出したのだった。

「良いところへ、お気付きなされた」。
直貞は膝をうって氏時の案に賛意をあらわした。

「速やかにまた密かに。敵方に気付かれぬよう進めるのが肝要でござりましょう。――直貞はひとまず国東へ帰り、京の將軍尊氏様へ九州の現状をお知らせ申して、強い將軍と軍勢の速やかな九州派遣をお願いしたいと思います。このままでは九州はことごとく宮方になってしまっておそれがあります。本来なら大友本家のお屋形様が將軍へ注進せねばならぬところながら、ただ今は敵に降参している身なれば黙っておらねばなりません。――先のことは、強い山城ができてからのこと…」

老練な直貞は、今後の氏時の行動についてこまごまと進言して国東へ引き揚げた。

③ 降参は返上する

―― 菊池軍への応援拒否 ――

国東の飯塚城へ帰った田原直貞は、すでに家督を譲っている孫の氏能(うじよし)に、大友が南朝軍に降参した次第を説明し、京の將軍へ、九州の南朝軍が優勢な現状を訴える書状を、氏能の名で送らせた。

氏能の父(直貞の長男)貞広は、二年前に九州探題の一色範氏が、南朝軍の菊池武光と組んだ足利直冬の乱を討ったさい、一色側の援軍として出陣し戦死している。直貞は孫の氏能が、父に似て武勇に勝れた将に成長しているのを愛していた。

国東の浦々には、強力な水軍の浦辺衆がいて、田原氏の手足となつているので、京都との往復は海路により、連絡は早かつ

たに違いない。

尊氏からは早速「凶徒を討伐する大将を必ず九州につかわすから、それぞれ要害を固めて大将の到着を待つように…」との教書を、氏能あてに送っている。これがこの年（正平十年―一三五五）の十一月十日付けである。

大友氏時は、高崎山の城塞（じょうさい）構築に力を注いだ。当時の山城は、中世末ごろから見ると、華麗な天守閣を高くと中心にすえた、いわゆる権威の象徴ではなく、あくまでも実戦向きの砦である。要所に空（から）壕（ぼり）をめぐらし、険しい崖（がけ）地帯を取り込み、土塁や石畳を築いて、柵（さく）を設けたもので、山容は険しいほど不落を誇りえた。

高崎山城の規模はどれほどのものであったか。その遺構調査を大分市が近年行っているが、調査によると、山全体の遺構は容易につかみ得ないが、尾根筋だけでも、土塁・石畳による郭（曲



輪―くるわ）と呼ばれる防備が二十段近くあることが確かめられたという。

また空壕も、山の傾斜にしたがって、十数か所も横長く掘られた跡を発見している。むろんこれらは、後世の戦国時代に、より完全に整備されたであろうが、氏時による構築がその基礎となっていることはいまでもない。

険しい山に取りついでての工事だから、急いだにしても相当な月日を要したことだろう。完成したあと、大友の館のすべてがここに移転したのではない。日ごろは常のごとく府内高国府(上野)の館を中心にした生活を営み、いざ、というとき高崎山の城に籠(こ)もる段取りである。

正平十三年(北朝・延文三年―一三五八)四月、足利尊氏が病死し、子の義詮があとを継いだ。

「強い大将を九州へ…」と、田原氏能に約束したことは実現しないままだ。九州探題職の一色範氏が、懐良親王を奉じる菊池軍に攻められて長門国へ逃げたあと、北朝側は範氏を解任し、範氏の息子を探題に送ったが、これも菊池軍らに攻められて京都へ逃げ帰った。

そこで細川繁氏を探題職に任命し、九州の北朝軍強化を命じた。ところが彼は、九州へ赴任の途中、病を得て急死している。そんなことで「強い大将」の九州派遣は実現せず、九州探題のある博多は南朝軍に踏みこまれたままであった。

この年の秋、もはや九州の北朝方は、この一城だけが強い抵抗線だ、とみられていた日向国の穆佐(むかさ)城(東諸県郡高岡)を、菊池武光が攻撃に向かった。

この城には、足利幕府の代官として日向国に来た畠山直顕が籠っていた。かつて尊氏に背いた直冬が九州に逃れて味方を募ったさい、直顕は直冬に組みして尊氏の不興をかったりしたが、直冬失脚後は幕府に忠誠を誓い、南朝方に屈する気配はない。

穆佐城は山城で、かなり堅固な備えと聞こえており、手強(て

ごわ)いことが予想された。懐良親王はそこで菊池軍の応援に、豊後の大友軍を差し向けることを考えた。降参した大友氏時が誓約どおり、南朝に対して忠誠を見せるにはよい機会だ。親王は豊後に使者を送って、直ちに日向国に向け出兵するよう促した。

ところが、親王の使者を迎えた氏時は、出兵の要請をあつさり断った。

「降参は返上つかまつると、親王の宮へお伝え願いたい」
そういって、使者を丁寧に送り返したのである。

④ 再び豊後攻撃へ

―― まず 銭瓶峠から攻略 ――

高崎山の城郭は完成した。いかな敵の来襲も恐れることはない。既に京都の幕府ともひそかに気脈を通じ、九州北朝勢力のばん回に向けて、豊後が力を蓄えてきたことも認識させてきた。そこで懐良親王から、日向国穆佐（むかさ）城攻めに援軍を送るよう要請されたのを好機として、大友は降参を返上する、と宣言したのである。

大友氏時としては、降参の屈辱をはねかえしてせいせいすると共に、北朝方の豊後大友の健在を誇示することは、南朝勢力の強大さに恐れて声を潜めている九州各地の武士に対する檄（げき）ともなると考えた。また強力な九州探題を幕府が送りこむきっかけとなることを願った。

予想通り懐良親王の怒りは大きかった。

「誓ってお味方すると、ぬけぬけと申した氏時めの面を、思

い出すだに胸くそが悪うなる。菊池軍の帰還を待つて、直ちに誅伐（ちゅうばつ）に全力を傾けねばならぬ」

親王は声を荒げて氏時の不信をののしり、日向の畠山討伐へ動員している菊池武光らの帰りを待った。

手強（てごわ）いと思っていた日向の穆佐城は、菊池軍の力攻めの前に、さほどの日数を要せず落城し、城主畠山直顕は逃去。菊池軍は早めに帰還してきた。そして、大友の「降参返上」の不信ぶりを聞いて、今度こそ完膚なきまでに叩（たた）きのめし、息の根を止めてしまえとばかり、休息の間も惜しんで、豊後攻めに転じた。

菊池武光は、かつて父武時が鎮西探題に北条英時を攻めた時、大友に裏切られて敗死した恨みが、むらむらと胸中によみがえってきた。

「大友への遺恨は必ず晴らして見せるぞ。豊後の大友は心許せぬ痴者（しれもの）と、ようわかったぞ」

懐良親王をいただき、菊池軍を主力に編成した九州南朝軍は、二度目の豊後路へ、どつと押して行った。時に正平十三年（北朝・延文三年―一三五八年）十二月。第一回の府内攻めから三年目である。



南朝軍は謀者（ちようじゃ）を放つて、府内大友勢の陣立てをさぐらせ、高崎山上へ砦（とりで）を築

いて立てこもっていることを知ったが、この城がどれほど堅固なものか、ということまでは、菊池武光らにも、測り知ることができなかった。

「降参返上と豪語している氏時には、それ相応の備えを固めての、勝算あつてのことにちがいないが、何ほどのことやある」先の府内攻めで、なんなく降参した大友勢のことが記憶にあるので、見くびつた思いが先立つのもやむをえない。

このときの南朝軍の豊後侵入路は、第一回の進路と同様に、玖珠・由布を経て大分川峡谷路を下った。この進路には、大友配下の将や郷土が住み、小さくとも抵抗線はあつたはずだが、激流が押し流すように通り抜けている。こうして高崎山南ろくにあたる、挟間地域一帯を攻略し陣を張った。

ここから高崎山を近々と見上げ、山容や陣固めをさぐって、この山城が、予想をはるかに越える、天然の要害であることを、菊池武光らは思い知らされた。

そこでまず、高崎山の西の腰に当たる銭瓶（ぜにがめ）峠の攻略から始めることにした。ここに主力を注いで押さえれば、これより山南の腰をぐるりとめぐる古くからの官道を手中にでき、ひとまず城兵を閉じこめたことになる。その後で、海に臨んでいる北ろくを警戒しつつ、ゆるりと攻め登る手だてを考えればよい、と一決した。

銭瓶峠を攻めとるには、次の三つの進路が考えられる。まず賀来の七蔵司より攻め登る正面の進路。つぎに内成を経て鳥越より丘陵づたいに銭瓶峠に達する道。さらに鳥越の峠を降って、海側より赤松村の急坂を攻め登る道。

記録には単に「赤松の対戦」とある。銭瓶峠は赤松地区に入るからだ。峠の地形から考えて、右の三路から同時に攻撃する以外はない。しかもこの三路からにしても、道は狭く、道以外は岩と崖（がけ）と急坂の密林である。兵を展開して、しゃむに攻め登るわけにはいかない。

⑤ 志賀勢背後に迫る

— 親王軍動転…撤退へ —

「たかがこの一城。いかに要害といえども大友が弱兵どもに、何ほどのことができる」

懐良親王や菊池武光らは勢いたっていた。だが、兵を進めると、高崎城側は、待っていましたとばかり、銭瓶峠を中心に伏せていた兵が、矢ぶすまをもって迎え討つて来た。思いのほかの手強さである。

犠牲をかまわず力攻めに押してゆけば、損害は大きくなるばかりで成果はあがらない。戦法を変えて、城下町府内を攻めとつて高崎城を孤立させ、じっくりと持久戦に持ち込み、突破口と戦機をさぐるしかない、と武光は考え、銭瓶峠集中攻撃の手をひかえさせた。

ところが、持久戦どころか、意外な事態が起こって南朝軍を慌てさせた。

「大友を支援する軍勢が、背後に突如として現れた」

という、物見からの注進が入ったのである。

堂尻川（どうじりがわ、挟間地域を貫流する大分川の古称）の東岸に軍勢が迫っているというのだ。旗印から、大野荘の地

頭・志賀氏の軍と分かった。

志賀氏は、大友の支族の棟梁を自負する家柄で、根っからの北朝方である。先の玖珠の高勝寺城(伐株山)合戦のさい、府内の大友館を急襲しようとした南朝勢の先手を打って、大野荘の志賀頼房が兵を急派して大友館を守り、南朝軍に一步も踏み込ませなかったエピソードがある。頼房は今病気がちで隠居し、子息の氏房が、大野荘の鳥屋(とや)城に抛り、父に劣らぬ機敏な用兵で、本家大友の守りに任じている。

今回も、南朝軍が高崎山城攻めに来襲したので、敵の虚を突いて、支援の軍を進めたわけだが、大友氏時が高崎城に籠(こ)もるさい、来攻した南朝軍の背後をおびやかす打ち合わせは、既にできていた。だから高崎城中には支援軍を送らず、鳥屋城に兵を待機させ、出撃の機会をうかがっていたのである。

鳥屋城は、現在の朝地町城山にあり、挟間地域とは、野津原をはさんで、馬で駆ければ半日で達する距離に位置する。

南朝軍が銭瓶峠の攻撃に掛かり、攻めあぐねている好機を逃さず、志賀勢は大挙して温見峠を駆け抜け、今市、今畑を越えて、堂尻川東岸に陣を展開した。まさか大友支援の軍勢が、不意に背後に現れるとは、夢にも思わなかった菊池武光は動転した。

「高崎山の城構えを甘く見たのも、支援軍の来攻に油断した



のも、ことごとくこの武光めの手抜きでござった。お許し下され」

懐良親王の前に深く頭を垂れた武光に、親王は声を励ましていった。

「責任は私にもあります。後悔する暇（いとま）は今は無いです。攻め直せばよいではないか。ただ、すみやかに軍を収め、退く手立てを…」

志賀の軍勢が、どれほどの攻撃力を持っているか、予断は許されないが、こちらと干戈（かんか）を交えれば、高崎城からも、どのような攻撃の火ふたをきるかもしれぬ。そうなれば腹背に敵を受け、さらにどこからか支援の伏兵が現れる可能性もある。大損害をこうむる前に退くに如（し）くはない。軍議は一決した。ただちに下知がとび、夜のうちに軍をまとめ、来た道を由布郷へ向けて退いた。

夜が明けてみると、展開していた南朝軍は、潮の引いたように消えていた。

志賀氏房は、南朝軍退却の気配は嗅（か）ぎ取っていたが、むやみに攻めれば必死の反撃にあつて、手痛いめにあわないとも限らない。敵が逃げ去れば、戦いは勝利だ」と、見て見ぬふりをしていたのだ。そして退いて行く後を追ひ、損害を与えて苦しめてやれと考えた。

後ろを見せて逃げる軍は、弱くて討ちやすい。まして大分川峡谷の狭い道や、由布郷を越えて玖珠郷への谷道は、退却する殿（しんがり）軍の兵を痛めつつ追尾するには絶好の地形だ。志賀の軍勢は、親王軍を執拗（しつよう）に追って行った。

⑥ 三度目の豊後侵入

— 鳥屋城攻めおあずけ —

南朝軍の豊後攻め当時の戦いぶりを知る古記録の一つ「志賀氏房軍忠状」に「宮（懐良親王）退却のとき、玖珠八丁辻まで追って戦った」ということが記してある。この「八丁辻」という地名は今はない。歴史研究家は、現在の「玖珠郡九重町大字湯坪字八丁原」がそれに該当しそうだといっている。八丁原は筋湯温泉の南方、現在八丁原地熱発電所の施設が建ち、近くの大岳地熱発電所と共に噴気を高く上げている。

ここから肥後境は近く、阿蘇郡に通じている。南朝軍が豊後に攻め入るさいは、肥後の菊池郡から日田郡に入って、玖珠、由布の進路をとったが、退却のさいは玖珠から直接、阿蘇郡へと退路を選んだ。道路事情は当時どうだったか知るよしもないが、肥後へ逃げ込むには、この方が近い。



不覚をとった親王や菊池武光は、このままでは納まらな
い。先に偽りの降参に心を許し、高崎山築城の時間を与えたことも不覚であった。そして今回の退却に至る二重の不覚である。ことに武光は、父の無念を晴らす思いもこめての侵攻であった。それが返り討ちにあつたかたちとなったのだから我慢がならぬ。地団

駄（じだんだ）を踏んで再攻の火を燃やした。

退却に当たって志賀勢の追尾に悩まされはしたが、兵の損失は軽かった。陣の立て直しに、さほど時間はかからない。退却から三か月足らずしかたっていない、正平十四年（一二五九）三月、三度目の大友討伐の軍を起こした。

今度の豊後侵攻は、直接大友の本拠高崎山城を指さず、まず大野荘の鳥屋（とや）城を攻めて志賀氏房を討つ作戦をとった。先の失敗を繰り返さないためである。退却の直接の因となったばかりか、執拗（しつよう）に追って来て、後方をおびやかした氏房憎しの思いもついていた。

志賀氏の拠（よ）る鳥屋城は、鎌倉時代に大友の族一万田氏の築いた由緒を持つ。肥後と豊後府内を結ぶ往還をにらんでいる要衝で、標高七百七十余メートル、天然の堅塁である。

南朝軍は、肥後から豊後の久住高原に入り、今の久住町から朝地と進み、鳥屋城を囲んだ。

「たかが大友支族の小さな山城。踏みつぶすに何の手間ひまがかかるものか」と、菊池武光らは、この城攻めを軽くみていた。ところがどっこいそうはいかぬ。予想外の守りの堅さであった。幾度も力攻めに攻撃をかけたが攻めにくい上に反撃も鋭い。

懐良親王は武光を呼んで云（い）った。

「鳥屋城を囲んで、はや十日の余にもなるが、このようなところで兵を疲れさせては、主戦場になる高崎山城攻めに、力が出せなくなりはいませんか」

「私もそれを考えておりました」

志賀氏房をこらしめたい思いは、むしろ懐良親王の方が強く、

鳥屋城を高崎山城より先に落としてしまえ、と云い出したのは親王の方であったから、ひとまず鳥屋城攻めをおあずけにして転戦を、と親王から云い出すのを武光は待つていたのだ。

「敵に悟られぬよう陣を動かしましょう。この城は次の機会に攻め落としてみせます」

武光は直ちに転戦を開始した。新たな攻撃意図があるように鳥屋城側に見せかける陽動作戦をとりつつ、主力は温見峠を越え、どつと挟間に駆け降りた。

南朝軍が囲みをといた、と気付いた志賀勢が、急ぎ討つて出たときには、南朝軍の主力は移動をほとんど終わっており、志賀勢の追撃に備えた伏兵との小ぜりあいがあった程度である。

高崎山麓を囲んだ南朝軍が、今度こそは、と鋭い攻撃の火ぶたを切ったのは四月十二日。高崎山はすでに初夏の若葉におおわれていた。

このときの合戦の様様を記した記録が残されていないので、高崎山城のどこをねらう作戦を、菊池武光らがとったか明かないが、五月十二日に囲みをといて撤退するまでの一か月間、手を替え品を替えて攻め立てたのである。





オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたく願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「ロマンを追って」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタル版「豊後の武将と合戦」 第七章●南北朝動乱 高崎山の攻防 ①

2008年7月18日初版発行

著者 渡辺 克己

原著 2000年2月15日発行／発行：大分合同新聞社

／制作：大分合同新聞社文化センター／印刷：小野高速印刷

《デジタル版》

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

(〒870-8605 大分市府内町3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内)

©大分合同新聞社、渡辺克己、菅久

◇著者略歴◇渡辺克己
大分県佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、芸芸部の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退社。昭和二十七年から同四十二年まで大分市社会教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後の磨崖仏散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」等の著書。